

延辺朝鮮族自治州調査記

——延吉と龍井を中心に——

佐藤量、湯川真樹江、菅野智博、尹国花

本稿は、2016年8月18～20日に「満洲の記憶」研究会（以下、記憶研）の有志によって実施された、中国吉林省延辺朝鮮族自治州調査の記録である。本調査では、民族や国家をめぐる場所の記憶に注目しながら、延吉市、和龍市、図們市、龍井市を訪問し、都市の景観観察や「満洲国」（以下、括弧省略）期の建築物見学を実施した。調査には、記憶研の尹国花、菅野智博、佐藤量、湯川真樹江の4名が参加し、湯川以外の3名は18～19日のみの参加となった。本稿では、自治州の中心都市である延吉市と龍井市での調査内容を報告する。なお、本号掲載の「追憶——満洲点描」と「戦後延吉での生活——終戦から引揚げまで」も併せて参照されたい。

1. 国家と民族がせめぎあう地域・延辺

延辺朝鮮族自治州は、中国の吉林省に位置する朝鮮族の自治州であり、1952年

に設置された（1955年までは「延辺朝鮮自治区」）。当該地域は、ロシア、朝鮮民主主義人民共和国と隣接しているため、政治や経済の面において中国東北部の中で重要な役割を果たしてきた。その中心都市である延吉市には、約54万人が暮らししており、そのうちの約57%（2016年）が朝鮮族である。街中にはハングルがあふれているし、タクシーの運転手の多くも朝鮮語を話し、日常的に朝鮮料理を食べる。人々は、朝鮮の文化を大切にしながら暮らしていた。

延辺朝鮮族自治州は、かつて満洲国期に間島省と呼ばれ、日本人と関係の深い場所であった。満洲国期には、軍や満鉄関係などの職に就いていた日本人が、朝鮮人⁽¹⁾や漢人などの複数の民族と混住していた。また敗戦直後には、他の地域から引揚げてきた開拓団が避難生活を送る避難場所にもなった。さらには、日本軍捕虜を

ソ連に移送するための中継地点として捕虜収容所も設置されていた。延辺で生まれ育った日本人だけでなく、開拓団やシベリア抑留者など、延辺はさまざまな立場の日本人の記憶に刻まれた場所であった。

そして、延辺朝鮮族自治州の中でも、特に日本人とゆかりがあるのが龍井市である。日本は1907年に朝鮮人を保護するという名目で、龍井に朝鮮統監府臨時間島派出所を設置した。また、1909年には間島協約を理由に吉会鉄道の敷設権を獲得し、龍井に間島日本総領事館を設置して、移住朝鮮人に対する統治を始めた。以降、日本の敗戦まで龍井には官公庁などに勤務する日本人も多数暮らしていた。



龍井市街の様子

撮影日：2016年8月19日

撮影者：湯川真樹江

龍井は日本人にとって重要な地であったと同様に、朝鮮人にとっては民族独立運動の中心地でもあった。1910年の韓国併合後、朝鮮半島の多くの民族運動家ら

が満洲に亡命し、既に形成された朝鮮人社会を基盤として国権回復のための抗日民族運動を展開した。龍井はその中心の一つであった。1919年には朝鮮の「3.1独立運動」の一環として、3月13日に約3万人が各地から龍井に集まり、抗議運動が行われた。また、龍井は民族教育の中心でもあった。龍井には、瑞甸書塾をはじめ、明東中学校、大成中学校など多くの民族学校が設置された。これらの学校では、近代教育を実施すると同時に、民族教育を通じて多くの抗日・民族独立運動家を育成してきた。



「青山里抗日大捷紀念碑」

撮影日：2016年8月18日

撮影者：菅野智博

2. 「龍井タウンマップ」の記憶

記憶研のこれまでの活動のなかで、池田雅躬氏や西田純明氏、猪伏昌三氏など、複数の延吉や龍井出身者と出会い、彼らを対象とする資料収集や聞き取り調査を実施してきた。そのなかで、池田氏からは「龍井タウンマップ」という地図を譲り受けていた。この地図は、かつて龍井に暮らしていた日本人たちが、戦後に再び集まって記憶を頼りに作成したものである⁽²⁾。手書きのため、方位や縮尺は正確ではないが、どこの場所にどのような店や学校があったかなどが記された記憶地図である【図1】。このような記憶地図は、龍井だけでなく大連や新京などほかの満洲の都市出身者たちも作成する傾向にあり、地図を作成する過程も含めて「ノスタルジア」を喚起した。今回の龍井調査では、この「龍井タウンマップ」を手掛かりに、日本人にとって馴染みのある場所をめぐった。

まず訪れたのは、旧間島総領事館である。旧間島総領事館のあった建物は龍井市政府によって使用され、日本による侵略の歴史を伝える展示館となっていた。展示内容は、朝鮮人への拷問風景や民族抵抗の様子が絵画や蝋人形などによって物々しく表現されていた。特に取調室のあった地下室はそのまま残され、水牢などは当時の厳しい状況を伝えていた。旧間島総領事館は、「愛国主義」と「民族精神」を表象した場所であった。

次に「龍井地名起源之井泉」を訪ねた。「龍井地名起源之井泉」は、龍井市の地名の由来となった井戸であり、1879年より朝鮮からの移民であった張仁碩(장인석)、朴仁彦(박인연)により発見された場所である。この井戸は文化大革命の時期に1度破壊されたが、1987年龍井市政府により復元され、現在は小さな公園のなかに位置している。



旧間島総領事館

撮影日：2016年8月19日

撮影者：菅野智博



「龍井地名起源之井泉」

撮影日：2016年8月19日

撮影者：湯川真樹江



龍井中學校



「抗日時期革命烈士」の記念碑



日本人名が刻まれた墓石
 撮影日：2016年8月19日
 撮影者：湯川真樹江

井戸から大通りを歩き続けると、旧大成中学校があった。ここは現在、龍井中学校として利用されている。かつて龍井一帯には恩真中学校（1920年～）、明信女子中学校（1920年～）、永新中学校（1921年～）、東興中学校（1921年～）、大成中学校（1921年～）、光明女子中学校（1926年～）、が存在していたが、再編を重ねて1985年に龍井中学校に統合されている。現在の龍井中学校には、満洲国期の旧大成中学校校舎の一部が展示館として利用され、民族教育の拠点であったことが強調されていた。

町の東部には丘陵地帯が広がっており、そこは「東山」と呼ばれている。東山一帯には、恩真中学校、教師住宅、収容所、「慰安所」⁽³⁾、そして日本人墓地などがあったため、日本人の記憶に深く刻まれている場所であった。しかし現在は、高層アパートや広場、公園が整備され、公園には「抗日時期革命烈士」の記念碑が建立されており、当時の面影はない。かつてこの地にあった日本人墓地の形跡もなかったが、別の場所で日本人の名前が刻まれた墓石を確認することができた。それらは中心地にある龍井市文物管理辦公室の庭に割れたり壊れたりした状態で無造作に置かれていた⁽⁴⁾。どのような経緯でこの場所に放置されているのかは定かではない。

その龍井市文物管理辦公室だが、建物の外観から教会と思われる建築様式であった。市内中心部の大通りに面した敷地

の庭には、墓石のほかにも灯籠や石碑など、日本語やロシア語が刻まれた石造物が放置されていた。興味深いことにこの場所は、市内中心部に位置するにもかかわらず記憶地図には記載されていなかった。歩いて回ったことで偶然発見したこの場所について帰国後確認すると、おそらく旧聖潔教会とみられ、おもに朝鮮人によって使用されていた教会であると推測された。教会組織は現在も大韓聖潔教会として韓国各地で活動しており、朝鮮人との関係が深い。この建物は、1982年に龍井朝鮮族民俗博物館となり、1994年に吉林省愛国主義教育基地に指定されたのち、現在は龍井市文物管理辦公室として利用されている。日本人の記憶からこぼれ落ちていたこの場所は、朝鮮民族や中国国家の記憶が表象される空間として機能していたのであった。



無造作に置かれた石造物
 撮影日：2016年8月19日
 撮影者：菅野智博



旧聖潔教会
 撮影日：2016年8月19日
 撮影者：湯川真樹江

3. おわりに

「龍井タウンマップ」を頼りに龍井の町を巡ったことでわかったことが2つある。ひとつには、日本人にとっての記憶の場所は極めて断片的であり、実際の龍井の町のなかでも限られたエリアであったということである。おもに学校、住宅、収容所、墓地などが日本人にとって強く記憶されている場所であるが、それらの場所を結ぶ途中には、朝鮮人や漢人の暮らすエリアが広がっていた。朝鮮人が集まっていた旧聖潔教会は、日本人の記憶地図には記載がなく、日本人の記憶からこぼれおちていた。満洲国期の龍井の都市

構造をめぐって、どれほど民族別の居住構造があったか、民族間交流がどれほどあり得たのかなどについて今後調査していきたい。

もう1つは、様々なアクターによる重層的な記憶である。龍井には、日本人以外にも、朝鮮人や中国人をめぐる記憶の場所が混在していた。「龍井地名起源之井泉」や旧聖潔教会のように朝鮮人にゆかりのある場所もあれば、旧間島総領事館や「抗日時期革命烈士」の記念碑のように中国国家の歴史が表象された場所もあった。他方で、龍井市文物管理辦公室で放置されていた日本人の墓石や、破壊と修繕を経て現在に至る「龍井地名起源之井泉」などもあり、記憶と忘却を繰り返しながらこの場所の集合的記憶が形成されていく様子が見て取れた。今回の調査でも、都市に埋め込まれた国家や民族の重層的な記

憶と歴史を読み解くことの重要性和面白さを感じることができた。今回の発見もふまえて、今後も調査を継続したい。

(1) 本稿で使用している朝鮮人という表記は、中華人民共和国建国の1949年より前から一般的に使われていた。当時の新聞においても1949年以前は朝鮮人という表記を使い、1949年以降は朝鮮族と表記したことが確認できるため、朝鮮人と表記する。

(2) 龍井に暮らしていた日本人は「海蘭会」という団体を形成し、引揚げ後も交流を継続している。ちなみに「海蘭」という名前は、龍井市を流れる海蘭川にちなんで名づけられた。

(3) 戦後設けられた「慰安所」。日本人女性がソ連軍兵士を相手に接待した。

(4) 龍井市文物管理辦公室は「龍井タウンマップ」に記されている本願寺医院の近くにあった。

